



こさつ 御難続きの陸奥の古刹



天台寺を美しく彩るあじさい

天台寺はいつ建てられたんだろう？

日本一の漆の里、二戸市浄法寺町。ここに名誉住職瀬戸内寂聴さんの“あおぞら法話”でも有名な天台寺があります。世界遺産平泉よりも古いと言われる東北屈指の古刹、天台寺。一体いつ建てられたのでしょうか。

「桂清水天台寺縁起」によれば、奈良時代、聖武天皇の命を受けた僧侶行基が、霊夢に導かれてこの地を発見し、神亀5年(728年)、桂の大木から聖観音像を刻んでそれを祭ったとされています。しかし、さまざま矛盾点もあり、この伝承をそのまま信じることはできないとされています。

東北史の大御所である森嘉兵衛氏や高橋富雄氏は、ナタ彫り観音像の作風などから平安中期10～11世紀の創建ではないかとしており、発掘調査結果からも同様の見解が出されています。

天台寺は、平成25年9月から大規模な保存修理工事が行われています。解体修理の際、本堂から「明暦四年」(1658年)と墨書された木材が発見されました。これまで、現在の本堂は盛岡南部藩第2代藩主、南部重直が万治元年(1658年7月改元)に



改修工事前の天台寺本堂

建立したとされていましたが、今回の発見で改めてそのことが立証されました。

なぜ仏像がこんな無残な姿になったんだろう？

北奥の仏教の一大中心地だった天台寺。藩政期には繁栄を極めました。5間(約9m)四方の本堂、六坊と呼ばれた衆徒の宿坊、阿弥陀堂、薬師堂、弁天堂など40近いお堂が立ち並ぶなど、現代では想像もつかないほどの壮観だったといわれています。

ところが、天台寺の収蔵庫に収められているこれらの仏像をご覧ください。片手の取れたもの、焼け焦げたもの… 一体何が？



痛ましい姿の仏像たち

明治政府は、慶応4年(1868年)と明治3年(1870年)に、神道と仏教の分離を命ずる通達を出します。これに端を発し、「廃仏毀釈」と呼ばれる寺院・仏像の破壊運動が全国に吹き荒れます。ここ天台寺でも、押しかけた民衆により何十体もの仏像が焼かれたと伝えられています。

一方、当時の住職が一人で仏像を残らず焼き払ったとする明治4年(1871年)8月の文書が残され

ています。このことから、当時この地を管轄していた江刺県の役人から仏像を破却するとの脅しを受けた天台寺では、住職が自ら処分したことにして、実際には、檀家の人たちが仏像を山に隠したりして守ったのではないかと考えられています。

天台寺の受難はまだまだ続きます。明治11年(1878年)他家から入った住職が梵鐘や古木を伐採して売り払います。さらに、昭和28年(1953年)には住職と役員が樹齢数百年の霊木1,200本を伐採して売り払うという暴挙を行いました。そのため、古色蒼然たる天台寺の風景は失われてしまいました。



未だ伐採跡が生々しい境内

なぜ寂聴さんが住職になったんだろう？

荒廃する天台寺を救ったのが住民の熱意とマスコミの支援でした。

昭和51年(1976年)4月には、型破りな性格と毒舌説法で知られる作家の今東光氏が住職に就任しますが、残念ながら翌年9月に他界してしまいました。

そこで白羽の矢が立ったのが、著名な小説家でもあり後に文化勲章を受賞した、今氏の弟子の瀬戸内寂聴さん。当時の山本浄法寺町長を先頭に、就任を懇願します。その日11月14日は、奇しくも寂聴さんが13年前に今氏から得度(出家の儀式)を受けた日と同じでした。熱意に押されて寂聴さんの住職就任が実現。昭和62年(1987年)5月、に晋山式(住職が就任する儀式)が行われました。「壁が落ち、畳は腐って、廊下はきしんだ」ほど衰退していた天台寺を見事復興に導くこととなります。

天皇陵があるというのは本当だろうか？

ここ天台寺には、なんと!天皇陵といわれているものがあります。南北朝時代の悲劇の天皇、長慶天

皇の御陵です。

伝説では、南朝側だった長慶天皇は、武家方の追及を逃れて陸奥に渡り南部氏の庇護を受けますが、やがて体調を崩し、現在の二戸市福田で崩御されます。足利幕府側の監視が厳しかったため、夜中ひそかに天皇の遺骸を天台寺に運び埋葬したとされています。

この長慶天皇、晩年の足跡がほとんど不明で、全国に長慶天皇の墓と称する場所が26か所もあるそうです。

そういえば、南部せんべい発祥伝説にも長慶天皇が登場します。いずれ、この地方と何らかの関わりがあった方のように。



長慶天皇の御陵

なぜ浄法寺に「浄法寺」はないんだろうか？

さて、天台寺のある二戸市浄法寺町ですが、ここには「浄法寺」というお寺がありません。あったという記録もありません。なぜ浄法寺と呼ばれているのでしょうか。

この地は、奥州合戦の後、頼朝の家臣、畠山氏に与えられ、後に鎌倉の浄法寺の僧侶だった一族の重慶が相続したことから、浄法寺という地名になったといわれています。ところが、鎌倉にも浄法寺という寺があったという記録がありません。

蝦夷征伐と関係が深かった群馬県鬼石町(現藤岡市)の浄法寺との関連を指摘する意見もありますがはっきりしません。

平成31年度までの予定で保存修理工事が進められている天台寺。ふだん見れない土台や部材を見ることができるチャンスでもあります。ぜひこの機会に東北屈指の古刹 天台寺にお越しください。

【参考文献】  
二戸市史編さん室「続・二戸歴史物語」  
浄法寺町「浄法寺町史 下巻」  
毎日新聞社盛岡支局「天台寺 そのナゾに裏む」  
岩手県立博物館「みちのくの霊山 桂泉観音 天台寺」  
えみし学会会長柴田弘武「天台寺の謎にせまろう」(えみし学会HP)



**なぜ竪穴住居の屋根が土なんだろう?**

一戸町にある御所野遺跡は面積約7.6haの遺跡です。約4,500年前から約500年間、縄文人の集落がありました。4,500年前といえば、エジプトのあのクフ王のピラミッドが作られた時代です。

あれっ!?よく見ると竪穴住居の屋根が土?確か小学校の時、竪穴住居はかや葺きだったと教わりましたが...

なぜ土屋根なんなのでしょう?

平成8年(1996年)に、西ムラから極めて保存状態のよい焼失家屋跡が発見されました。その炭化材や焼土の状況を調査したところ、縄文時代の遺跡としては全国で初めて、竪穴住居の屋根に土を載せていたことが判明しました。

縄文時代の定説を覆す大発見でした。発掘結果をもとに土屋根住居を復元したところ、夏は涼しく、冬は暖かいことが分かりました。



復元された土屋根住居の内部の様子

御所野縄文公園内には土屋根住居が復元されています。みなさんもどんな感じだったか実際に体験してみてください。

**御所野遺跡とはどんな遺跡なんだろう?**

この御所野遺跡が注目を浴びるきっかけとなったのは工業団地開発でした。

以前からこの地に遺跡があることは知られていましたが、平成元年(1989年)から事前調査を行ったところ、予想以上の大規模集落跡が発見されました。そのため工業団地はほかに移してこの遺跡を保存することになり、平成5年(1993年)には国の史跡に指定されています。

この御所野遺跡一体どのような遺跡なのでしょう?

遺跡の中心部には、配石遺構(ストーンサークル)とお墓があります。このエリアを中心として、中央、東、西の三つの集落で構成されています。集落全体では約500年間に実に800棟もの住居が建てられた集落だったようです。

竪穴住居跡は直径4m以下の小型のものから10数mもある大型のものまであります。大型住居を



中心に中・小型住居が集まって一つのグループを形成していたと思われます。祭祀に関わる遺物は、大型住居と中型住居から出土しているの、小型住居と大・中型住居は別な機能を持っていたと考えられています。

**土屋根住居はなぜ燃やされたんだろう?**

さて、発見された焼失家屋跡ですが、失火による火事で燃やしてしまったものなのでしょうか?

実際に燃やす実験をしてみたところ、すぐに酸欠状態になってしまい、中々燃えないことが分かりました。つまり火事で燃やしたものではない。ということは、わざと燃やした...



土屋根住居の焼失実験

一体何のために?理由を知りたいところですが、周りに教えてくれる縄文人がいません。

そこで参考になるのがアイヌの「カス・オマンデ」という風習。これは死んだ人があの世に行ったときに住む家がないと困るので、死者の出た家に家財道具や衣類を入れておの世に送るというものです。御所野の焼失家屋も同じ理由で燃やされたのかもしれないですね。

**なぜ土面の鼻が曲がっているんだろう?**



さてこの顔の表情。みなさんにはどのように見えますか?誰かに似ているような気がします...。しかも鼻が曲がっています。

実はこの土面、昭和5年(1930年)に、現在

【参考文献】  
一戸町教育委員会・御所野縄文博物館「縄文の記憶 御所野遺跡」  
高田和徳「縄文のイェムラの風景 御所野遺跡」  
大島直行「アイヌ文化に探る縄文の息吹」(財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構「H14普及啓発セミナー報告書」)  
廣分直一「日本民俗文化誌 古蹟とその周辺を探る」

の「一戸高校近くの<sup>まぐま</sup>時前遺跡」というところで見つかった、国の重要文化財にも指定されている「鼻曲り土面」です。全体が赤く塗られており、両側には穴が開いていることから顔につけていたと思われます。

この鼻が曲がった土面、非常に珍しく、全国でも5例しか見つかっていないそうです。しかもすべて岩手県北部から青森県東部にわたる地域で見つかっています。

ところで、なぜ鼻が曲がっているのでしょうか?仮面の告白は?

考古学者の甲野勇氏は、その顔全体のゆがみは、顔面神経がけいれんを起こしたときの表情、つまり縄文時代のシャーマン(呪術者)が神がかりしたときの表情を表したものとしています。

**世界遺産登録を目指す遺跡**

ここ御所野遺跡の素晴らしさは、周囲の自然も守られていること。また、ボランティア団体の「御所野遺跡を支える会」や一戸南小学校の子どもたちによる「御所野愛護少年団」が遺跡の清掃活動やガイドを行うなど、地域住民が維持・活用に参加していることです。子どものガイド、一度聞いてみたいですね!

この御所野遺跡、世界遺産暫定リストに登載されている「北海道・北東北の縄文遺跡群」を構成する17の資産の一つになっています。岩手県内で構成資産になっているのは、この御所野遺跡だけです。「GOSHONO ICHINOHE」の文字が世界中を駆け巡る。そんな日も遠くないのではないのでしょうか。



「御所野遺跡愛護少年団」



**なぜ断崖に観音堂があるんだろう？**

女神岩の恋敵鳥越山。その鳥越山の断崖に見る人を驚かさず観音堂がそびえています。何とも言えない冷厳な雰囲気です。来訪者の満足度が非常に高いスポットの一つです。

ところで、一体なぜこのような断崖にわざわざ観音堂を建てたのでしょうか？

この鳥越観音堂、鳥越山の南面断崖、火成岩が空洞化した洞穴に建てられています。

伝説では、大同2年(807年)に慈覚大師(円仁)が創建したと伝えられています。残されている棟札からは、室町時代後半には観音巡礼の霊場として賑わっていたようです。

ほかにも二戸市内の岩谷観音や朝日観音、平泉の達谷窟など、洞窟に立てられたお堂があります。洞窟内のお堂は日本国内のみならず、東アジア一帯に分布しています。洞窟と聖地、どのような



関係があるのでしょうか？

「古事記」にも天岩戸神話があるように、古くから洞窟を神聖なものとする考えがあったのかもしれない。宗教学者の宮家準氏によれば、洞窟を他界への入口とする世界観があるとしています。

ちなみに、今回観音堂の中で撮った写真、何と！オーブ(霊体)らしきものが写っていました。まさにパワースポット！



**なぜ「鳥越」というんだろう？**

この「鳥越」という地名自体、何やらいわくありげな名前ですね。

なぜこのような名前になったのでしょうか？

伝説では、慈覚大師が天台宗布教の旅の途中、飛来した白鳥が墜落する山を見つけ、里人から「あの山には白蛇の姿をした魔物が棲んでおり、鳥でも越えられない」と教えられたことに由来するとされています。この白蛇を慈覚大師が退治して観音堂を建立したと伝えられています。



**なぜ南部藩主も参詣したんだろう？**

この鳥越観音堂、歴代の南部藩主からの尊崇が厚く、寺領を与えられたり、改築を施されたりしています。万延元年(1860年)には時の南部藩主利剛が参詣に訪れています。なぜ、わざわざこんな険しい山の中まで来たのでしょうか？

かつて、ここには源義家が奉納した兜の鍬形(兜の前に付いている前立物、P40のイラスト参照)があったと伝えられています。南部家は源義家の弟義光の流れを汲んでいるとされておりその関係もあったのでしょうか。

**なぜ鳥越が竹細工の名産地なんだろう？**

この鳥越集落は、古くから竹細工の名産地として知られています。なぜ、この鳥越集落が竹細工の名産地になったのでしょうか？



伝説では、ある夜、慈覚大師の前に観音菩薩が姿を現し、「この里人は生活が楽ではないため心が荒んでいる。私の化身を竹で編んでその編み技を村人に授けよ」と告げられました。見る間に観音菩薩の姿が白蛇の姿となり、胴体が透いて骨組が編み模様として写し出されました。大師がその編み模様を里人に伝授したのが竹細工の始まりとされています。

ここが竹細工の名産地となったのは、材料となるスズタケが豊富にあったこと、また山間地で耕地に恵まれなかったため竹細工で生計を助けていたためと考えられています。昭和の初め頃までは、門外

不出の技法とされていたそうです。

鳥越の竹細工が記録に残るのは藩政時代からです。ところが、平成25年(2013年)同じ一戸町にある御所野遺跡から衝撃的な発見がありました。出土した土器の底から、何とスズタケと思われる編み物の痕跡が見つかったんです！現代まで続く竹細工は縄文が起源なのでしょうか？

**危機をどうやって乗り越えたの？**

明治期には、北洋漁業出稼者が使用する竹行李の需要が大幅に増え、昭和20年代後半には手提げかごが全国的な大ヒット商品となりました。ところが昭和30年代以降、ビニール製品に押されて竹細工は衰退の一途を辿りました。

存続の危機を感じた一戸町は、平成7年(1995年)に「鳥越もみじ交遊舎」を作り竹細工の技術の伝承に取り組みました。また、小学校の授業でも竹細工を行うようになりました。

実用的で丈夫、使い込むほどいい色つやになるといふ本物の魅力が注目され、マスコミでも取り上げられることが増えたことなどから、今では注文に生産が追いつかないほどの大繁盛なようです。

鳥越にある「もみじ交遊舎」では、竹細工の見学や製作体験もできるんですよ。使い込むほどに味わいが増す竹細工。みなさんも一家に一品いかがですか。



【参考文献】  
一戸町「一戸町史 上巻・下巻」、宮家準「生活のなかの宗教」  
柴田亦雄「岩窟の観音堂」(「久慈・二戸・九戸の歴史」所収)。  
工藤敏一「鳥越の竹細工」(同上 所収)  
岩手県農工会連合会二戸地区広域指導センター「鳥越を中心とした二戸の竹細工」  
「伝統の竹細工、縄文が起源か」(岩手日報平成25年12月18日)

# 奥州街道その1

## 四連続で残る奇跡の一里塚



岩手町と一戸町の境界に位置する「御堂・馬羽松一里塚」。左側の東塚が一戸町、右側の西塚が岩手町

### 奥州街道とは？

奥州街道は、徳川幕府の命で整備された五街道の一つです。正確には江戸の日本橋から白河までですが、仙台、盛岡、青森を経て津軽半島の三厩まで続く街道も俗に奥州街道と呼ばれていました。

明治天皇の東北巡幸の際に道幅2間(約3.6m)に拡張されたことから、藩政時代はかなり狭い道だったようです。

道中の宿場の数は、東海道五十三次が有名ですが、奥州街道は百十四次もありました。盛岡から江戸までは、普通に歩いて13,4日、二戸から江戸だと170里(約680km)、約17日間もかかったそうです。

江戸時代、庶民が伊勢参りなどに行く際、県北地方では、農作業が終わった12月に出発することが多かったようで、当時の記録を見ると、伊勢参りに2か月程度、金毘羅参りだと100日間もかけて旅行していたようです。



藩政時代のままの姿をとどめる「浪打峠一里塚」

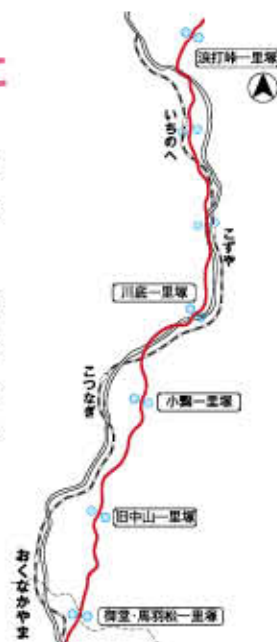
### 一里塚って何だろう？

一里塚が本格的に整備されたのは江戸時代で、慶長9年(1604年)、2代将軍徳川秀忠の命により全国の街道に整備されました。それまでまちまちだった一里の単位を36町(約4km)と定め、一里ごとに道の両側に5間(約9m)四方の土を盛り、その上に榎、松、杉などの木を植えることとしました。実際には大きさもまちまちで、道の片側だけに築かれたものも多かったようです。

その役割は、①徳川幕府が全国を掌握した証として新度量衡制度を周知する、②旅人が距離を知るための目安とする、③馬やかごの料金の目安とする、④休息所として旅人に木陰を提供するなどの役割があったといわれています。また、幕府が参勤交代の往還日程を規定する目的もあったとされています。

### なぜ一里塚がこんなに残っているんだろう？

明治以降の道路整備の際、道幅の拡張に伴って多くの一里塚が邪魔者として除却されました。ところが、二戸地域には多くの一里塚が今でも残っています。特に一戸町は山間の険しい場所を街道が通っていたため、明治17年



(1884年)から始まった国道工事では、道路が西側に切り替えられました。そのため、けがの功名と言うべきか、奇跡的に奥州街道の多くが当時の姿で残っています。

一里塚も南から「御堂・馬羽松」「旧中山」「小瀬」「川底」「浪打峠」と5か所で残されており、そのうち「御堂・馬羽松」から「川底」までは、実に4か所連続で一里塚が残っているという、全国的にも極めて貴重な場所です。ほかに迂回路として利用されていたと思われる古道にも「塚平」「笹目子・上女鹿沢」「穴久保・下女鹿沢」の3か所に一里塚が残されています。一戸町内だけで実に8か所、県内で最も多く一里塚が残るタイムカプセルのような場所です。

盛岡などの都市部でもたまに一里塚を見かけることがありますが、道の片側に1基だけ残されているものがほとんどです。一戸町のすぐいところは、道の両側に一里塚が残っている場所が5か所もあることです。町内の奥州街道のうち未舗装区間7か所(8.86km)と「御堂・馬羽松」「旧中山」「川底」「浪打峠」の4か所の一里塚については、「往時の姿をとどめ」「一里塚等が良好に残り、近世の交通を知る上で貴重」という理由で、平成22年2月に国指定の史跡にも指定されています。

また、平成27年10月には、日本ウォーキング協会などによる「新日本歩く道紀行100選」にも選定されました。※奥州街道の国史跡指定箇所 <http://goo.gl/jcJGxw>

### 一里塚は本当に役にたったんだろうか？

ここで素朴な疑問が。現在の道路標識と違い一里塚には目的地までの距離が記されていません。



【参考文献】  
一戸町「一戸町誌 下巻」、一戸町教育委員会「奥州街道 いちのへ 歴史の道歩く」  
二戸市「二戸市史 第二巻」 同 第三巻 人物二戸市  
山田晃「奥州街道の整備」(「図説久慈・二戸・九戸の歴史」所収)  
荒井秀規他編「日本史小辞典(交通)」

一里塚は本当に役に立ったのでしょうか？実際に旅した人から聞けばいいのですが、残念ながら存命の人がいません。

東海道に関する研究ですが、一里塚は旅人の距離情報にはならなかったという説もあります。理由としては、正確に1里ごとに築かれたものでないこと、目的地である江戸などへの里数が記されていないことなどで、むしろ1里〜4里間隔で設置された宿場の方が旅人にとって重要だったというものです。



宿場町の雰囲気色濃く残す、一戸の街並み

ところが、江戸時代後期、盛岡藩士 漆戸茂樹が記した「北奥路程記」には、絵図に一里塚が記号で記されており、解説文にも「此一里塚より6丁行て高屋敷村」「此塚より浪打峠迄145間」などといった詳細な記述があります。

江戸時代初期の慶長18年(1613年)、英国人ジョン・サリスは紀行文に「この標(一里塚)は人夫及び馬を貸すものが一里大凡3ペニー以上の賃金をとらせざらんがために設けられたるものなり」と記しており、運賃計算の指標としての役割に着目しています。

確かに目的地までの距離については、宿場の果たす役割が大きかったと思われるのですが、東海道と違い山中を通る道の多かったこの地方では、次の宿場までの目安とするなど、一里塚は役に立っていたのではないのでしょうか。

江戸後期に書かれた「雨窓閑話」という本には「いま一里、あと一里と、一里塚を楽しみにするのは、旅のはかどりが格別だ」と書かれています。

「くたびれた やつが見つかる 一里塚」そんな古川柳が残っています。ここは古の旅人がどんな気持ちで歩いたか追体験できる全国でも稀有の場所です。皆さんも実際に歩いてみてはいかがでしょうか。

村田謙代「江戸時代の東海道における旅と一里塚の史的探究」(平成17年度奈良大学大学院文学研究科修士論文)  
もりおか歴史文化館企画展「旅の枝折(しおり)」  
板橋源、佐々木博「北上市の一里塚」

# 奥州街道その2

## 街道を通った旅人と怪異



歌枕「末の松山」として知られる街道随一の名所「浪打峠の交叉層」。吉田松陰も菅江真澄も明治天皇もここを通った。

### よしだしょういん 吉田松陰はなぜ二戸に来たのだろう?

この奥州街道、全国地図を作成した伊能忠敬、大森貝塚の発掘で有名なエドワード・S・モースなど、そうそうたる面々がここを通っています。

その中には、何とあの吉田松陰もいます。松陰はなぜここを通ったのでしょうか?

嘉永4年(1851年)12月、21歳の松陰は、広く各地の志士と交わって国事を話し、民情を視察するため、盟友の宮部鼎蔵と共に東北行きを計画します。ここに登場するのが盛岡藩士江幡五郎。兄の敵討ちのため同行を希望し、松陰はそれを快諾。ところが長州藩の手違いで出発日までに通行手形が発行されず、松陰は手形なしで江戸を出発。つまり脱落でした。松陰と宮部は、盛岡に直行する江幡と福島県白河で別れ、会津、新潟、佐渡、秋田、弘前、青森と回り、嘉永5年(1852年)3月9日に三戸から蓑ヶ坂を越えて現在の二戸に入ります。金田一、福岡を経て、浪打峠を越えて、その日は一戸に泊まり、翌10日には盛岡に向けて旅立っています。

その吉田松陰、二戸の地を訪れてから7年後の安政6年(1859年)10月、安政の大獄に連座し処刑されます。同行した宮部鼎蔵も元治元年(1864年)6月、池田屋事件で命を落とします。一方、皮肉にも江



青面金剛像(一戸町中山)

幡五郎は維新後も生き永らえ、那珂通高と名を改めて明治政府に出仕することになります。

### すがえまづみ 菅江真澄が経験した“恐怖の一夜”とは?

数多い旅人の中でも出色なのが菅江真澄。三河国(現在の愛知県)で生まれ、天明3年(1783年)30歳のときに諸国の旅に出立し、以来76歳で没するまで、大半を奥羽の旅に費やし、各地の風俗や習慣、故事来歴などをこと細かに記録し続けました。

その菅江真澄が最初に二戸地方に来たのが大飢饉最中の天明5年(1785年)9月。秋田県鹿角から浄法寺を通り、一戸に入ったのが9月5日。現在の10月中旬です。翌6日には、一戸の小沢(小鳥谷)というところの農家に食事なしでよいと無理に泊めてもらうことに。とはいいながらアワの飯に塩漬けの桃の実を添えた夕食が出されたそうです。

その夜中、菅江真澄が物音に目覚めて辺りを見回すと、この家の老人、炉にたきぎを燃やして刃物を研いでいました。周りには氷のように研ぎすました斧やまさかりが。気配に気付いた老人は、白髪を振り乱して、らんらんと光る目であたりを見回します。やがて、外から荒男二人がやってきて、旅人がいると聞き「夜が明



菅江真澄

けないうちに」と恐ろしいことを言う。まるで『まんが日本昔ばなし』の世界です。やおら、男たちが刃物を手に旅人に襲いかかる・・・と昔ばなしであればそういう展開になりますが、そうはなりません。やがて男たちは野良着姿になり、歌いながら連れ立って山に仕事に行ったそうです。菅江真澄、人を疑ったことを深く恥じたということです。

この菅江真澄という人自身、かなりのミステリアスです。生まれてから旅に出るまでの前半生を一切人に語らず、常に黒い頭巾をかぶっていたことから「常冠り」といわれていました。秋田藩主佐竹義和の前でも頭巾を取らなかったとか。菅江真澄が亡くなったとき、若

い弟子たちが頭巾を取ろうとしましたが、側にいた老人から制止され、結局は頭巾をかぶったまま茶毘に付されたそうです。一体、真澄の頭巾の下がどうなっていたのでしょうか? ちょっと気になります。



江戸時代末期建築の県内最大の茅葺住居「旧朴館(ほおのきだて)家住宅」(国重要文化財)



### みのざさか 「蓑ヶ坂」に出た「蓑」の妖怪って何だろう?

現在の二戸市と青森県三戸町の境に位置する蓑ヶ坂。奥州街道一の難所といわれていました。



奥州街道一の難所「蓑ヶ坂」

「蓑ヶ坂」という名前、いかにもいわくありげです。伝説では、昔、旅人が蓑ヶ坂を越えようとする、激しい風雨となり、旅人が困っていると、そこにうまい具合に蓑が。「やれやれ助かった」と思って手にした途端、頂上付近にある淵に引きずり込まれたとか。この蓑、実は沼の主の大ムカデ。後に玉山昇という盛岡藩士が退治したとか。ちなみに、青森県側では沼の主は大蛇だったと伝えられています。

明治9年(1876年)と明治14年(1881年)に明治天皇の東北巡幸が行われました。総勢150名ほどの大所帯で、

明治9年の巡幸の際の随員は岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、大隈重信など日本史の教科書に登場するオールキャストが随行していました。

天皇御一行は蓑ヶ坂を越えて三戸に向かおうとしましたが、馬車に乗ったまま越えることができず、馬に乗り換え、金田一の青年10名が馬車を押し上げたといわれています。

蓑ヶ坂頂上付近には「駕籠立場」と呼ばれる休憩所があります。ここから望む蛇行する馬淵川の風景はまさに絶景です。明治天皇も随行のカメラマンに命じて写真を撮影させています。この蓑ヶ坂、平成27年10月には日本ウォーキング協会などによる「新日本歩く道紀行100選」にも選定されました。

様々な謎とロマンを秘めた奥州街道、皆さんも、江戸時代の旅人や幕末の志士の気分で奥州街道を



駕籠立場からの眺望

歩いてみてはいかがでしょう。ただし、くれぐれも見知らぬ蓑には手を出さないように・・・

【参考文献】  
二戸市「二戸市史 第二巻」 同 第三巻 人物二戸市  
高橋賢治「真澄の奥た二戸地方」(『国説久慈・二戸・九戸の歴史』所収)、高橋千鶴「江戸の旅人」  
山村竜也「吉田松陰と松下村塾の志士100話」  
菅江真澄「けふのせば布」(『菅江真澄遊記1』所収)

小さな城跡探検隊「奥州街道街道沿いの城跡」  
二戸市立図書館「二戸ギャラクシイ展第1集」  
岡田益男「東北御巡幸」(Web 東北物語伝承館)

## 東北本線物語

今も残る謎の鉄道遺構



## なぜ蒸気機関車が3両で牽引しているんだろう?

上の昭和39年(1964年)の写真をご覧ください。現在のIGRいわて銀河鉄道線、かつての東北本線の奥中山付近を疾走するSLの写真です。なんと3両のSLが列車を牽引しています!

なぜこんなことをしたのでしょうか?

奥中山高原駅と小繋駅の間には、東北本線最高地点である標高約450mの十三本木峠があります。勾配が急だったため、貨物輸送の際、当時のSLでは時速20kmほどしか出ず、しばしば渋滞を引き起こしていました。そこで、パワーアップを図るため機関車を3両連結して運転することにしたのです。

今の一戸町役場付近に機関区が設置され、上り列車はそこで補助機関車を連結して奥中山を越えました。最盛期には13台のD51と200人ほどの職員がいたそうです。3両の機関車が連携して走るのはいかほどの苦労があったようですが、三重連で走るSLの姿は全国の鉄道マニアの格好の撮影スポットとなっていたそうです。

なお、同様の機関区は沼宮内駅にも設置されました。



現在のIGRいわて銀河鉄道

## なぜ難所に鉄道を通したんだろう?

さて、そこで疑問が。どうしてこんな難所に鉄道を通したんでしょうか?

それを考えるためには、当時の鉄道の置かれていた状況を知る必要があります。

当時鉄道は嫌われ者でした。機関車の煙で健康や農作物が被害を受ける、悪い病気が流行する、泥棒がやってくるなどの理由から全国で鉄道反対運動が起きました。

当初、奥中山の急勾配を避けて、現在の線路の東側、平糠、姉帯方面を通るルートが計画されていました。ところが、町の中心部に線路を通すのはけしからんと反対運動が各地で起き、やむなく奥中山の山岳地帯を通すことになりました。

二戸市でも、小野三十郎という人が自己の土地を提供したり村人を説得したりして、何とか福岡停車場(現二戸駅)を作ることができたそうです。

## なぜトンネルが3本あるんだろう?

IGRいわて銀河鉄道に乗って二戸駅に向かう途中、妙なものを見つけました。何とこのトンネル、入口が三つあります。普通、線路は上下2本のはず?…なぜでしょうか?

実はこれ、一戸駅と二戸駅間にある鳥越トンネルなんです。昭和43年(1968年)に東北本線を複線化

工事した際、トンネル内の曲線改良のため入口部分の付け替えを行ったため、以前のトンネルの入口がそのまま残ってしまったものです。途中からは新しいトンネルと合流しているため、入口三つ、出口は二つになっています。



今も残る開業当時の鳥越トンネル

険しい奥中山を経由するルートになったことで、12の鉄橋をかけなければならないなど様々な苦労がありました。その中でも一番の難工事はこの鳥越トンネル(1,055m)でした。掘削機もなかったため、すべて手掘りで工事を進めましたが、200mも掘り進むと、坑内に空気が入らなくなっていました。そこで約30cm四方の杉の箱で箱詰めにした空気を昼夜兼行で奥の工事現場まで運んだ…と書いている本もありますが、そんなことが本当に可能だったのでしょうか?

実際には、穀物を精選するため道具である唐箕(とうみ)に長い樋の様なものを付けて空気を送り込んで工事を行ったようです。(二戸市歴史民俗資料館菅原館長の教示による)

その鳥越トンネル、完成まで1年8か月かかりました。当時は日本で3番目に長いトンネルだったそうです。ちなみに昭和43年(1968年)のトンネル工事は、掘削技術の進歩により、わずか10か月で開通しています。



唐箕(二戸市歴史民俗資料館)

## なぜ東北本線は私鉄だったんだろう?

さて、この東北本線、明治24年9月に全線開通した日本で2番目の幹線鉄道で、なんと最初は私鉄だったんです。

【参考文献】  
大内章「いわて鉄道物語」「いわて鉄道百年」、一戸町「一戸町史」  
菅原孝平「福岡停車場と小野三十郎」、『図説久慈・二戸・九戸の歴史』(所収)  
岩手の土木史研究会「いわての土木遺産」  
[写真提供] 大木 茂氏(東京都)、高屋鏡樹氏(京都府)

どうして私鉄だったのでしょうか?

明治政府は、当初、国で全国に鉄道建設する計画でしたが、明治10年(1877年)に勃発した西南戦争で財政難に。そこで華族や士族等の民間資本を募り、明治14年(1881年)11月、「日本鉄道会社」が設立されました。東北本線は、民間会社である日本鉄道会社により建設された鉄道だったんです。

鉄道開通により、これまで半月ほどかかっていた東京～盛岡間が約18時間に短縮されました。ちなみに当時の運賃は東京～盛岡間が3円28銭。労賃をもとに換算すると、現代の貨幣価値にしてなんと約13万円!そのため利用は低調で、一日の利用者は20人程度だったそうです。

## ほかにどんな鉄道遺構が残っているんだろう?

今も住民の足として活躍しているIGRいわて銀河鉄道線。沿線には、岩手川口駅構内に残る水倉庫跡など、東北本線時代の遺構がほかにも様々残っています。昔は冷蔵車に氷を入れて食品を冷やしていたんですね。

みなさんも、たまにはIGRに乗って、のんびり車窓の風景でも眺めながら二戸まで旅してみたいかでしょうか。きっと思いがけない発見があると思いますよ。

開業時の姿を止める  
荒瀬鉄橋(一戸～二戸間)「冷蔵車」に使う氷を入れていた倉庫跡  
(岩手川口駅)



鉄の産地の光と影



「鉄銭」と呼ばれる切り離し前の密銭  
(軽米町歴史民俗資料館収蔵)

たたら製鉄って何だろう？

たたら製鉄とは、日本に古来からの製鉄法で、粘土でつくった炉に、原料の砂鉄と木炭を入れて数日間わたって燃やして鉄を取り出す製鉄法です。6世紀後半(古墳時代後期)に朝鮮半島から伝えられ、江戸時代中期に技術的に完成したとされています。ちなみに「たたら」とは大型のふいごのことです。

現在の岩手県北地方は、原料の砂鉄と燃料である炭に恵まれていたことから、古来より出雲と並ぶ砂鉄の産地として知られていました。かつて八戸藩だった軽米から久慈方面にかけて、鉄山跡と考えられる遺跡が数百か所あり、軽米町だけでも40か所を超えています。



たたら製鉄炉断面  
(軽米町歴史民俗資料館所蔵)

江戸時代後期、洋野町大野に八戸藩の役所があり、鉄山を管理していましたが、そのうち主だった6つの鉄山を「大野六ヶ鉄山」と呼んでおり、軽米町にも「玉川鉄山」などがありました。藩営とはいえ、実際の経営は御用商人に任されており、「岩手のてっぺんふしぎ発見vol.1」にも登場した「軽邑耕作抄」の著者でもある軽米の豪農 淵沢園右衛門も天保5年(1834年)から5年間経営を任せられ、経営再建に手腕を発揮します。

鉄山の隆盛に伴い、生産された鉄鉄などを使って農具、鍋釜、鉄瓶などの生活用具を作る鑄造業も盛んとなりました。当時、鉄製品の製造技術者を「焔屋」と呼んでいました。軽米町でも、鑄造業が盛んな上館、

出目、瀧里の焔屋を総称して「上館焔屋」と呼んでおり、高い技術力で知られていました。



玉川鉄山跡

「密銭」って何だろう？

さて、たたらによる製鉄業が「光」の部分なら、この地域には「影」の部分とでも言うべきもう一つの「産業」がありました。それが江戸時代後期、この地域で取締から逃れて山中で行われていた「密銭」作りです。「密銭」とは「密鑄銭」、つまりニセ金のことです。ニセ金作りの証拠を残すはずがないので、正確な数は不明ですが、軽米地方だけでも分かっているだけで20か所以上、ほかにも盛岡藩領の二戸市、一戸町、浄法寺などでも作られていたという記録があります。そんな犯罪者の巣窟のような場所だったのでしょか？ いえいえ、ここで密銭を作っていたのはごく普通の人たちでした。

なぜ「密銭」が作られたんだろう？

密銭作りが盛んだったことには理由がありました。江戸時代中期から、農村にも貨幣経済が浸透してきました。ところが幕府で鑄造する貨幣が足りません。そこで幕府は仙台藩に貨幣の鑄造を委任しましたが材料の銅が不足したため、やむなく明和7年(1770

年、明和5年とも)に、仙台領限りでの流通という条件で「鉄銭」の鑄造を許可しました。

しかし、材料である鉄が足りずに、八戸藩、盛岡藩からも原料鉄を購入することになりました。その代金の支払いに鑄造した鉄銭を当てたため、八戸藩、盛岡藩にも大量の鉄銭が流入し、やがてそれが流通することになりました。

また、密銭作りが盛んだった背景には、この地を襲った悲惨な飢饉の歴史がありました。ニセ金であろうと、金さえあれば何とか命をつなぐことができたことから、天明の大飢饉(1782年～1788年)以降、文化・文政期(1804年～1831年)にかけて密銭が急速に出回ってきました。

鉄や粘土、炭などの原材料が豊富にあったこと、また高い鑄造技術を持つ人々が存在したこと、それらがやむをえぬ庶民の自衛策としての密銭の鑄造に結びついたようです。もし密銭がなかったら、もっと悲惨なことになっていたのかも知れません。

ちなみに、岩手県内では、ほかにも雫石町や西和賀町でも密銭鑄造の記録が残されています。

密銭は本当に使えたんだろうか？

しかし、見るからに粗悪な密銭、本当に使えたんでしょうか？

当時は売る方も買う方もニセ金と分かって売買していたようです。もちろん、ニセ金なので値段は悪く、正銭の半分か3分の1程度、幕末になると4分の1程度だったそうです。仮に正銭の半値だとしても、密銭を買った方は、正銭に混ぜて使うことで1文が2文になり、売った方も同様に正銭に混ぜて使ったので、双方とも、かなりの利益がありました。

なぜニセ金と分かっているのに通用したの？という疑問が湧きます。しかし、メンバーがそれを「お金」と認めれば貝殻でも石でもそれが「お金」になる。貨幣



制度の本質にからむ問題です。

密銭作りが黙認されていたというのは本当だろうか？

生活の自衛という側面はあったにしろ、ニセ金作りは犯罪です。盛岡藩も八戸藩もたびたび禁止令を出していますが、一向に密銭作りはなくなりませんでした。

厳罰に処された人もいますが、どうも両藩とも正銭不足を密銭で補うため、密銭作りを黙認していた節があります。八戸藩などは江戸藩邸に送金するに当たり、密銭を御用商人である近江屋に持ち込んで正銭を支払ってもらっていたようです。

橋野鉄鉱山と密銭との意外な関係とは？

平成27年7月に世界遺産登録された釜石市の橋野鉄鉱山。盛岡藩士大島高任により建設された日本最古の高炉跡などがあります。安定した品質の鉄を大量に生産できる高炉製鉄が伝統のたたら製鉄にとって代わることとなりますが、実は密銭と深い関係があります。



橋野高炉(三番高炉)

安政5年(1858年)12月から操業を開始した橋野高炉ですが、供給先の水戸反射炉が安政の大獄の影響で閉鎖され供給がダブついたため、盛岡藩では、産鉄の消費手段として銭座経営を思い立ちます。慶応元年(1865年)12月にやっと幕府から許可され、大迫、栗林、橋野に銭座を開設しますが、明治2年12月に新政府により鑄銭禁止令が出されます。しかし、その後も大規模な密造を継続していたところ明治4年発覚。銭座は廃止、高炉も1番高炉と2番高炉が操業停止となりました。

釜石に花開いた近代製鉄の源流、たたら製鉄。鉄の産地の光と影。これを機に軽米町などに残る製鉄や密銭資料を見に来てはいかがでしょうか。

【参考文献】  
菅原秀幸「南部密銭史」  
軽米町「軽米町史 下巻」  
二戸市「二戸市物語」  
大川茂樹「鑄物生産の脚 上館焔屋」(「四国久慈・二戸・九戸の歴史」所収)  
木村智明「たたら製鉄の隆盛」(同上 所収)  
軽米繁男「横行した偽金づくり」(同上 所収)